

## ロレンスが見た二〇年代のオーストラリア

古川原 哲夫

### 一 はじめに

D・H・ロレンスは一九二二年、シドニーの南四〇マイルの小さな町サーロウルで、わずか六週間で長編小説『カンガルー』（一九二三）を書きあげた。最後の章、「さらば、オーストラリア」はニュー・メキシコのタオスで書いたとはいえ、このような短期間で完成させるのは極めて例外的なことである。暗い、抑圧的なヨーロッパを逃れ、明るい、自由な新世界を訪れたロレンスは、激しいカルチャー・ショックを感じて、告白衝動にかられたのであろうか。

しかしオーストラリア体験から生まれた『カンガルー』は、ロレンスの小説の中で高い評価を受けることはほとんどなく、フランク・カーモードによれば、「ロレン

スの傑作として選ぶような人はいない<sup>(1)</sup>」。とはいえ作家、ロレンス本人が直接、リチャード・ラヴァット・サマーズとして登場する、初めての本格的な自伝的小説『息子と恋人』は別として）であり、オーストラリアの生き生きとした現実と、イギリスでの抑圧された生活を率直に語っている。ハリイ・T・ムーアによれば、この作品は『虹』や『恋する女たち』の系列には属さず、『衣装哲学』（カーライル）や『ツアラトウストラはかく語りき』<sup>(2)</sup>（ニール）のカテゴリに入るといえる。確かにこれはロマンではなく、エクリチュールの系譜に属するものといえよう。ここでは『カンガルー』と、その時代のロレンスの手紙から、彼が見たオーストラリアとイギリスの姿を、エミグレ（亡命者）の視点から追ってみたい。

## 二 エミグレ、エミグレの国へ渡る

一九二二年二月二六日、ロレンスとフリーダは蒸気船オスタリー号で、ナポリを出国した。スエズ運河、紅海を経て、ポートサイド、アデンに寄港しつつ、三月中旬にセイロン（スリランカ）のコロンボに到着した。コロンボの北東五〇マイルの美しい町、カンディでブルースター夫妻の提供してくれた古いバンガローに一か月滞在した後、四月二四日、西オーストラリアへ出航した。五月四日、フリーマントルに到着した。この航路は、一九五五年にオーストラリアの作家、C・J・コッシュがヨーロッパへの「グランド・ツアー」を行ったときと、ほぼ逆のコースである。

ロレンスがパースを訪れたのは、ナポリからコロンボへ向うオスタリー号上で知り合ったオーストラリア人、A・L・ジェンキンス夫人の勧めによるものであった。この船にはたくさんの「素朴なオーストラリア人」が乗っていて、ロレンスは良い印象を持っていた。ことにジェンキンス夫人は『息子と恋人』を持っていたので、親しく付き合っていた。そして彼女は『カンガル』のヴィクトリア・キャロットのモデルと思われる。パースではゼイベル夫人の「愛書家図書館」で地元の知識人たちに会ったりした。そこには発禁となっていた『虹』も

置いてあり、ファンに囲まれ楽しい一時を過ごしたようだ。パースの近くに住んでいたオーストラリアの作家、キャサリン・スザンナ・プリチャードは、ロレンスに会えると期待し、興奮のあまり早産してしまったという。<sup>(3)</sup>

数日間パースに滞在した後、一六マイルほど内陸部に入った、ブッシュに近い町、ダーリントンへ移った。ダーリントンでは、クエーカー教徒の看護婦、モリー・スキナーのゲスト・ハウス兼療養所にやっかいになった。ロレンスは、スキナーの『ヴォランタリー医療班の手紙』（一九一八）をもらい、その創造性と新鮮さに感銘を受け、共著で『ブッシュの少年』（一九二四）を出版することになった。この作品はスキナーの「エリスの家」という原作に、ロレンスが手を加え、最後の二章を書き加え、タイトルを「ブッシュの少年」に変えて、メキシコ旅行中に完成した。このタイトルはオーストラリアの作家、ヘンリー・ローソンの『ブッシュの子どもたち』（一九〇二）に倣ったものと思われる。

ダーリントンで、ロレンスは恐ろしい森の体験をする。彼はその時のことを早速『カンガル』の第一章で述べている。

ある満月の夜、サマーズはひとりブッシュの中へ分け入った。何と巨大な月だ、感電しそうだ。月光を浴

びた木の幹は、闇に包まれた葉陰からぬっと立ち上がった裸の青白い土着民（アボリジニー）のようだ。

しかし、何か物が影に潜んで目を光らせている。サマーズは、一、二キロほど入った丸裸の背の高い枯れ木の疎林のところに行った。木々は月光を浴びて燐光を発しているようだ。こうこうと輝く月にどれくらい見とれていたことだろう。その時突然、恐怖に身がすぐんだ。間違いなく木の間に何かいる。恐怖で髪が逆立った。何かいる。不気味な白っぽい立ち枯れの木々、索漠としたブッシュを見渡した。何だ、何もいないじゃないか。家へ戻ろうと踵を返した。その瞬間またしても、恐怖で髪が逆立ち、凍りついた。<sup>(4)</sup>

このようにしてロレンスは、オーストラリアの地霊に接した。五月一八日、パースからペンシユラー・アンド・オリエンタルの汽船、モルワ号に乗り、アデレード、メルボルンを経由してシドニーへ向う。モルワ号から五月二〇日に、ジャン・ジュータ宛てに、「オーストラリアには驚くべき空と空気と透明な青い色があり、その下には古めかしい土地がありますが、それはまるで眠れる女王のようであり、その上には何世紀にもわたる塵が覆いかぶさっているようです。はたして彼女は眠りからさめることがあるのでしょうか……」という手紙を書いて

<sup>(5)</sup>いる。また同じ日付で、コット、ことコテリアンスキー宛てに似たような手紙を書いている。彼は『カンガルー』で、復員軍人たちで組織するファシスト的な軍事組織、「ディガー・クラブ」の指導者、カンガルー、ことベイン・クーリーというユダヤ人弁護士のモデルと目されている。

親愛なるコット。われわれはグレート・オーストラリア湾にいます。再びさまよっています。西オーストラリアに二週間滞在しました。奇妙な土地、すばらしい青い空、透明な空気、純粹で人跡未到でした。そして限りなく広がる灰色の「ブッシュ」——これはガム・トゥリーのことで、林のようになりまばらに生えていて、下ばえが茂っていて、木が生えている荒地のようです。人々はとても親切だけど、ゆっくりしていて、次の段階に足を踏みだしたくないようです。……シドニーが気に入るかどうかわかりませんが、フリーダは小さな家を借りて、数か月滞在したいと言っています。彼女は動き回るのにうんざりしています。でも私は動き続けるのが好きです。<sup>(6)</sup>

確かにロレンスの生涯は、絶えずさまよい続ける、逃亡者のような生活であった。一九一九年まではイギリス

国内を転々と移動し、それ以後はヨーロッパ、オーストラリア、アメリカとさまよい続けた。その動機としては、新しい、あるいは別の世界への願望と、そして抑圧からの逃亡の両者が絡み合っているように思われる。今回の場合は明らかに、後者の動機が優勢であろう。

### 三 シドニーとワイアーク

五月二七日にシドニーへ到着する。そして二日後の二九日、シドニーから南四〇マイルの海岸ぞいの小さな炭坑の町、サーロウルで「ワイアーク」という名の小さな快適なバンガローを見つける。ここでロレンスとフリーダは二か月半の間、広大な海岸で泳いだり、散歩したりしながら、ほとんど誰にも会わずに暮らすことになる。そして直ちに『カンガル』に取りかかり、わずか六週間で完成させる。五月二八日付けのリヒトホーフエン男爵夫人宛ての手紙で、ロレンスはシドニーとワイアークについて次のように述べている。

ともかく私達は無事で、元気です。シドニーは巨大な立派な町で、半ばロンドン、半ばアメリカのようです。港は素晴らしく……でも物価が高すぎるので田舎へ来ました。シドニーの南五〇キロの海岸です。太平洋岸の低い崖の上にある小さなすてきな家を借りました。

た。……激しい波の音がしじゅう聞こえます……こちらは冬ですが、寒くはありません。でも今日は空が暗く、コンウォールを思い出します。石炭をたいしているのも、とても快適です。オーストラリアでは物事はとても静かに運びます。食物は非常に安く、良い肉がポンド五、六ペンスです。……シドニーは本当は好きになれません。人々はとても粗野で、みんな「便利」なもの——電灯、電車など——で現代的になろうとしています。彼らにとって、貴族というのは大きな店を持っている人たちのことであり、他のものは何も尊敬していません。労働者たちは非常に不満を持っていて、常にストライキで脅かされていて、社会主義をとなえています。

ロレンスはオーストラリアの民主主義に感服する。軍の監視下におかれたコンウォールとロンドン時代から、新世界へと脱出して、彼はまばゆいばかりの自然と、人々の素朴さ、自由な社会に共感をおぼえる。自由なのに、社会は順調に動いているのだ。『カンガル』の第一章の後半で、彼はオーストラリアの社会とイギリスの階級社会を比較している。

もちろん、見るところでは、ここの人たちのシドニ

一の舵取りはうまいと認めざるをえない。すべて順調で一条の乱れもない。騒ぎや悶着が起こる気配がまるでないのは、不思議なくらいだ。悶着を起こす人はいないし、警察も当局も開店休業の有様だ。お偉方の命令などなくても、万事ひとりでに円滑に楽々と運ばれている。当局も——上流階級も——お偉方すらいないも同然だ。それでも見たところ、満々と水をたたえた川のように淀みなく流れている<sup>(8)</sup>。

ところが、ヨーロッパは「貴族原理」を基盤として成り立っており、上層と下層の階級の区別をなくせば、無政府状態に陥ってしまう。でもオーストラリアにはその区別がなくなっているようであり、階級もない。あるのは「金とスマートさによる区別だけ」だ。そしてこの国では「誰も支配していないので、プロレタリアートと支配階級の差は地に落ちて」いる。サマーズは初めて真の民主主義に身を浸していると感じる。この場所は富の差があるとはいえ、「根っからの民主主義、足が地についた民主主義」だと実感する。

しかし大英帝国出身のロレンスは、共感を感じると同時に違和感を感じざるをえない。「責任ある階級と無責任な階級との間の歴然とした差」を見すごすことはできない。彼は「無政府主義」だけは許せないのである。炭

坑夫の息子から中産階級に這い上がったロレンスであるが故にであろうか、階級差別を軽蔑しつつも、階級社会がないと居心地が悪いようである。このような二律背反は、イギリス中産階級のインテリに特有の性質であろう。貴族、上流階級、そして労働者階級は安定した階級といえよう。しかしイギリス中産階級というのは、最も不安定な階級であり、劣等感と優越感が錯綜する、問題児の集まりであり、またそれ故に、文学史においては、豊かな遺産を残したといえるだろう。そうした伝統は、チャールズ・ディケンズ、H・G・ウェルズ、ジョージ・オーウェル、等にもみやくみやくと続いている。

ロレンスは現実動いている民主主義を見て、どうしてもなじめず、自分が「骨の髄までイギリス人」であることを自覚する。「サマーズはイギリス人に特有の無秩序への憎悪、権威への本能を持つ、真のイギリス人だった。だからオーストラリアでは評判が良くないと感じた<sup>(9)</sup>」。

「ワイアーク」での生活が軌道に乗った頃、六月三日付けの義妹（フリーダの妹）、エルザ宛ての手紙に、当時の生活が生き生きと描かれている。

……こちらでは誰にも紹介状を見せていないし、この大陸で誰一人として知人はいませんが、そのこと自

体が大成功です。初めて、国じゅうで知る人とていな  
いということが、こんなに素晴らしいことかと感じま  
した。パンや肉を持ってくる商人以外に訪ねてくる人  
はいません。誰も質問をしないし、出しゃばりではあ  
りません。イタリアと違って、質問せぬにあり、説明  
しなければならぬという必要がないのは良いこと  
です。……

人々はとても親切で、ざっくばらんです。町はバン  
ガローがまばらに散らばっているようで、ほとんどは  
波型トタン屋根の木造です。……男たちはたいてい炭  
坑夫なので、くつろいだ感じがします。町そのものは  
——ここでは決して村とは言いません——無計画で新  
しく、通りは舗装されてなく、教会は木造です。その  
新しい感じが良い。とても自由な感じですよ。……

……オーストラリア人はひどく日本人を恐れていま  
す。イギリスが没落すれば、権力は介入できないので、  
日本が直ちに入ってきて占領するだろう。ビジネスの  
問題としてきつとそうするだろう、と本気で信じてい  
ます。……

ここは私が訪れたなかで最も民主的な場所です。そ  
して民主主義を見れば見るほど、嫌いになります。そ  
れは全てを賃金、物価、電灯、トイレなどという粗野  
なレベルに墮落させてしまい、そして他には何も、全

く何もないのです。<sup>(10)</sup>

このようにロレンスは、オーストラリアの物質的な生  
活を延々と批判的に述べている。彼らの賃金は良く、ス  
マートなブーツを履き、少女たちは皆絹のストッキング  
を履き、ポニーや一頭立てのバギーや自動車に乗り、常  
に意味もなく動き回っている。ロレンスの目には、彼ら  
は空虚に思え、うんざりする。彼らは健康的で、外見は  
立派だが、「内面生活と内的な自我は死んでいる」。ウェ  
ルズの空想小説にあるように、彼らは機械でできた動物  
のようだ。「とはいえ彼らは信頼できるし、親切で、仕事  
は有能である。ドアをロックする必要はなく、盗みに入  
るような人は誰もいない。」

全てが楽天的であり、人々は何も思わずらうような  
ことはないかのようである。ロレンスは完全に自分が  
「外国人」のように感じる。というのはここでは、ヨー  
ロッパの不景気もなく、道徳的、心理的な緊張感もない  
からだ。そして外国人としての彼は、何も語るべきこと  
がないのだ。エルザへの長い手紙の終わりの方で、「で  
も一生懸命ある小説を書いてます、オーストラリアを舞  
台にした、奇妙なショウです」と述べている。そして八  
月には完成させて、ニュージージーランド、タヒチ、サンフ  
ランシスコへ向い、多分ニュー・メキシコのタオスで冬

を過ごす予定だと述べている。「残りの生涯をさまよい続けるような気がするけれど、私はかまわない」と永遠のエミグレは語る。

#### 四 『カンガルー』

これはロレンスにしては実に変わった小説である。自伝、旅行記、かつ政治小説であり、そして当時としては珍しいコラーージュのような手法を用いている。とはいえ、三〇年代のアメリカのロスト・ジェネレーションの作家、ジョン・ドス・パソスのように歯切れの良いものではない。そして内容は限りなくノンフィクションに近いものであり、自分自身の問題と格闘する告白記録である。

リチャード・ラヴァット・サマーズは「年収四百ポンド、詩やエッセイを書く作家」であり、「ヨーロッパでは全てが没落し、消耗し、終了した、だから彼は新しい国へ行かなければならないと決心した。最も新しい国、オーストラリアだ。」そしてオーストラリアの自然と人間に魅せられるが、直ちに嫌気がさし、フィレンツェやローマの街を思い出し、あれほど嫌っていたロンドンの春に郷愁を感じる。サマーズはシドニーの街を歩きながら、バリーミンガム通りを思い、マーティンプレイスではウエストミンスターが恋しくなり、サセックス・ストリートではコヴェントガーデンとセント・マーティン・レーンを

思い、サーキュラー・キイを見てはロンドン・ブリッジを思い出すのであった。しかしここはロンドンを覆っている古色蒼然とした魅力がない。「ただの代用品、バッテリーに代わるマーガリン」にすぎないのだ。

ジェイムズ・ジョイスもまた、アイルランドを捨てたエミグレ作家であるが、終生ダブリンの記憶から逃れることはできなかった。サマーズはロレンスもまた、ロンドンへの愛憎半ばする望郷の念から逃れることはできない。彼自身エミグレであるにもかかわらず、植民地的なものを徹底的に軽蔑し、拒否する。しかし彼はどこにも述べていないのであるが、新世界、あるいは植民地にはしばしば、本国以上に本国らしい風景や習慣が残っているのは事実である。これは北アメリカにしてもオーストラリアにしても同じことであろう。だがサマーズはやりきれなくなり、バンガローへ帰り、「少なくとも三か月は」我慢しようと決意する。ヨーロッパを捨てた罰として、この南十字星の国、まさに新しい十字架の国としばらく仲良くしよう、それから太平洋を越えて故郷へ帰ろう。こう決心すると、サマーズは気が晴れたのである。

やがてバンガローの隣の職工ジャック・コールカットは、妹の夫ウィリアム・ジェイムズ・トリウエラ（通称ジャズ）をサマーズに紹介する。ジャズは後に、社会主義者で労働運動の指導者、ウィリー・ストラザーズにサ

マーズを引き合わせる。ストラザーズはサマーズに労働者の解放と革命のために協力するよう頼む。

他方ジャックは、自分が関係している秘密組織「ディガー・クラブ」を紹介する。これは在郷軍人の地下組織であり、普段はアスレティック・クラブのような活動をしているが、徹底的な縦の命令系統を持つ軍事組織であり、五つの州に支部を持ち、時期をみて武力蜂起をねらっている右翼団体である。五章でジャックはサマーズにこの秘密組織のことを詳しく説明し、仲間に引き込もうとする。

六章「カンガル」において、ジャックは同志愛、血盟の兄弟愛を通じて連帯し、仲間に加わるように誘う。

そんな愛を強要されると、サマーズの頭の中は革命がおっ始まったようなものだった。これまでずっと管鮑の交わりを求めて止まなかった——ダビデとヨナタン、オレステスとピラデスのような友。血盟の兄弟を。これまでそういった友を持ってないことが残念でたまらなかつた。しかし、現実にその誓いを申し出られると——ヨーロッパを離れて以来二度あったが——嫌だつた。魂が望んでいない。

しかし、サマーズは男たちと何か生きた関係を持ちたかつた。実際、孤独感に苛まされていた。生き生き

とした連帯感が欲しい。だが、愛とか恋愛とか同志愛とかではない。血盟の兄弟愛でもない。そんなものではないのだ。

それでは何か？ サマーズは自問する。それは「白人には分らないもの」であり、「インドに行けば今でも感じられるもの——統治の神秘」である。「民主主義と平和主義が否定し抹殺しようとしている男同士別の関係——カーストでも世襲の貴族社会でもない、差異と生得の優越性を理解する神秘、服従の喜びと神聖な権力の責務」である。奇妙なことにここには、ヨーロッパであれほど嫌った権力と絶対主義への願望がある。しかしジャックに誘われて、カンガルとの昼食会へ向う前に、すでに反対の決意に達していた。「仲間とか同志愛とかいったものは自分に定められた運命とは正反対のもので、ジャックにもこの企てにも絶対に身を投じまいと。」

カンガルは有能なユダヤ人の弁護士であり、ジャックとは軍隊時代の知り合いであり、中尉だった。「ディガー・クラブ」の首席であり、本名はベンジャミン・クローリー、「ブレティン」誌ではかなり人気があった。カンガルは熱心に愛を通しての右翼革命の必要性を説いた。その方法は、高まっている左翼、社会主義者の運動による混乱に乗じて、政権を奪取しようというものであった。



サマーズは彼に愛と憎悪が混じりあう奇妙な感情をいだいた。

彫刻家にはうってつけの素材だ。というのは実物のカンガル―は醜いからだ――垂れ下がったユダヤ人特有の顔、前かがみの肩、高級誂えのチョッキと縞模様のダークグレイのズボンからはみ出さんばかりの丸い腹、異常に太い腿。しかし、サマーズには、その肉体さえ美しく見えた――いやそれを熱愛する人がいても不思議はなからう。……美しい。亜熱帯の何かの木に咲いた大輪の花のように美しかった。<sup>12</sup>

カンガル―は次第に、サマーズに対してホモ的な愛を迫るようになる。カンガル―ことベン・クーリーのモデルは、ロシア人サミュエル・ソロモノヴィッチ・コテリアンスキーだといわれている。彼はキエフ大学時代に過激派の学生であり、ツァーリの秘密警察に監視されていた。ロレンスは一九一四年七月三日に、イギリスの湖水地方でホーンという男の紹介でコテリアンスキーに会っている。彼は直ちにロレンスが好きになったが、フリーダは好きになれなかったという。しかしジェフリー・メイヤーズの伝記に載っている写真では彼は若くスマイトであり、「アッシリアの王様」のようであり、セム族の特

徴あるかぎ鼻、濃くカールした髪、黒い目」をしたエホバのような人物である。

このクーリーが率いるデイガー・クラブと、ストラザーズが率いる社会主義者との衝突が、この本の政治小説としての側面のクライマックスとなる。ロレンスの描写が、オーストラリアの当時の政治情勢をよくとらえているかどうかに関しては、評論家の意見は二つに分かれている。ロレンスは「シドニー・ブレティン」紙や、ワイアークのバンガローに散らばっていた古新聞を読むくらいに余裕しかなかったはずである。それにもかかわらず、驚くほど詳しく右翼の秘密の軍隊について書いている。デイガー・クラブのような組織は一般にオーストラリア人でも知らなかったはずである。このような立場に立つのはキース・セイガーである。彼によれば、そのような情報をロレンスが知っていたのは「たぶん船で出会ったオーストラリアへの帰還兵のだれかが、彼を信じて秘密を打ち明けたか、あるいは彼の協力を得ようとして話を漏らした」<sup>13</sup>のではないかと推測している。

これに対してジェフリー・メイヤーズはロレンスのデイガーズ・クラブの描写にはいくつかの「ひどい矛盾」があるとして、三つの点を指摘している。まず第一に、オーストラリアには革命を起こす動機がないという。なぜなら「イタリアと違ってデイガーが存在する理由はな

く政治は極めてうまく行われていた<sup>(14)</sup>からだ。むしろ「サマーズは真の敵は民主主義ではなく退屈だと感じていた」はずだ。二番目に、「ジャックの過激な方法と指導者カンガルーの理想の愛の間には非論理的な断絶がある」。というのはジャックは「ユダヤ人の資本家や銀行に支配されるのはいやだ」という反ユダヤ的な怒りを持っていながら、秩序正しく賢明なインテリのユダヤ人指導者に、温かい熱烈な愛を誓っているのだ。しかも全くユダヤ的な名前ではないベン・クーリーという男にである。第三に、「カンガルーの唱える、高邁な愛の政治というのは、ムッソリーニよりもむしろウッドロー・ウィルソン（ロレンスは軽蔑していたが）に近い考えであり、非常に指導者としてはふさわしくない」。実際に十六章では社会主義者の暴動のときに、無防備なカンガルーは群衆に怒鳴りかけているうちに銃で射たれてしまう。確かにこのような矛盾はいたる所に見られる。しかし彼は男同士の熱烈な同志愛を認めてはいるが、集団主義や全体主義は認められない、という点では一貫しているのである。サマーズはイギリスの軍国主義に反発してオーストラリアへ逃れてきたのであるが、ここでも集団的民主主義という一種の全体主義に直面することになる。ジェフリー・メイヤーズによれば十二章の「悪夢」は、「イギリスとオーストラリアの違いを述べているように

あるが、実際には両国が基本的に似ているということも明らかになっている<sup>(15)</sup>。」

## 五 「悪夢」

『カンガルー』の第十二章、「悪夢」はこの不思議な小説の中でも最も奇妙な章である。ここでロレンスは突然、コーンウォール時代の忌まわしい記憶を述べている。追憶的自伝ともいえる部分である。

ロレンスの妻フリーダはかつて、ノッティンガム大学の恩師である言語学教授、アーネスト・ウィークリーの妻であった。一九一二年五月、なかなか離婚を承知してくれないウィークリーに業をにやして、二人はフリーダの両親のいるメッツに駆け落ちをした。そこでロレンスは、ドイツの警備隊にイギリスのスパイだと思われて逮捕された。だがフリーダの父の尽力で釈放されている。こともあろうに、一九一六年に二人がコーンウォールに滞在中、ロレンスはドイツのスパイだという嫌疑をかけられ、軍当局によって張り込みや家宅捜査をされた。

戦争の波は今やイギリス全土を襲った。コーンウォールも水浸しだ。たぶん、この地は歴史上どの時代も、イギリス魂なんかに決定的に押し流され、沈められたことはついぞなかった。今それが起ころうとしている

——忌まわしい戦争末期の戦魂。さて、物語は矢継早にサマーズに不利な展開を見せ初めた。家の煙突には防湿用のタールが塗られていたが、それがドイツ軍への合図だとか、夫妻でドイツの潜水艦に食物を運んでいるとか、断崖に密かに石油を隠しているとか嫌疑がかけられた。低い石垣の陰に潜んだ男たちに張り込まれ、偵察された。<sup>(19)</sup>

確かに文筆業はなかなかきちんとした職業とは認めてもらえないし、近所の農作業を手伝ったり、ドイツの歌を合唱したりする二人は、好奇心の的となっただろう。第一次大戦の息苦しさから逃れて、コーンウォールへ来たのであったが、ここも安住の地ではなかった。

ロレンスは一九一六年、一七年、一八年と、三回も召集されて、身体検査を受けているが、いずれも肺炎のため不合格(グレードC)となっている。陰部やケツの穴まで覗かれる屈辱、兵隊たちの横柄な態度にすっかり嫌気がさし、張り込みや尾行をされると、サマーズは自分が犯罪者のように感じ、自己嫌悪に陥ってしまうのであった。やがてコーンウォールから退去を命じられ、ロンドンへ移るが、そこでも軍当局に動静を報告しなければならなかった。

このような第一次大戦中の体験から、「自由の国イギ

リスは死んだ、サマーズは屍同然」と感じた。そして陰鬱なイギリスを捨てて、ヨーロッパ、セイロン、オーストラリア、タヒチ、そして西からアメリカへ(ロレンスは東からの上陸を意図的に避けた)とエミグレの旅を続けたのである。

この間にロレンスは驚くほどたくさんの手紙を書き、また『カンガルー』のような、エクリチュールの系列に属する文を書いている。キース・セイガーが指摘しているように、ロレンスはカクテル・パーティーでのつまらない会話や、教授室でのシェリー酒を手にしてうるつきながら交わす会話を嫌っていたので、彼が会話を重視するという点が見逃されてきた。しかし彼は実際には会話を重視していた。ことにフリーダと二人きりの旅では、ほとぼしるようにエクリチュールの形で現われた。そして遠くにいる人々と会話を持続させたのである。そのような手紙や海外放浪中の小説においては、例の説教口調が多くなるのである。「彼は説教した。そしてその記録が小説という蓄音機に吹きこまれた。」<sup>(20)</sup>

『カンガルー』の中でロレンスは「自分自身の問題と激しく取っ組み合いをし、それをオーストラリアと呼んでいる」と述べている。しかし必ずしもオーストラリアとの遭遇を、単なるきっかけとして利用しているだけではないのではないか。明るい自由な新大陸との出会いに

よるカルチャー・ショックから、うつうつとしたイングリランドからのエミグレは、自らの苦況と願望を人々に伝える機会を見出したのである。そして自らを写し出す鏡としてのオーストラリア社会は、彼の自我との相対的な位置を考えれば、非常に正確な描写であるといえよう。

(あるかわら・てつお／法政大学経済学部教授・  
神奈川大学オセアニア研究センター客員研究員)

注

- (1) Frank Kermode, *Lawrence*, Fontana Press, 1973, 1985, p. 99.
- (2) Harry T. Moore, *The Priest of Love*, Farrar Straus Giroux, N. Y., 1974, p. 351.
- (3) *Ibid.*, p. 349.
- (4) D・H・ロレンス、『カンガル』丹羽良治訳、彩流社、一九九〇年、一八ページ。
- (5) *The Collected Letters of D. H. Lawrence*, ed. by Harry T. Moore, Heinemann, 1970, p. 704.
- (6) *Ibid.*
- (7) *Ibid.*, p. 705.
- (8) 『カンガル』二八ページ。
- (9) D. H. Lawrence, *Kangaroo*, Heinemann, 1970, p. 17.
- (10) *Letters*, pp. 706-7.

- (11) 『カンガル』一四九ページ。
- (12) 同書、一五九ページ。
- (13) キース・セイガー、『D・H・ロレンスの生涯』岩田昇、吉村宏一共訳、研究社、一九八九年、一七一ページ。
- (14) Jeffrey Meyers, *D. H. Lawrence, A Biography*, Macmillan London Ltd., 1990, p. 277.
- (15) *Ibid.*, p. 278.
- (16) 『カンガル』二七八ページ。
- (17) 『D・H・ロレンスの生涯』一七〇ページ。